

【書評】

高柳良治『ヘーゲルの社会経済思想』

こぶし書房, 2015年, 236頁

本書は、ヘーゲル研究に巨大な足跡を残された高柳良治氏の遺稿論文集である。前著『ヘーゲル社会理論の射程』（2000年）において氏は、ヘーゲルを「偉大な経験家」と評したが、それは理論と現実社会の接点を重んじたヘーゲル像に光をあてつづけた結果として得られたことでもあった。かつて哲学ではなく「社会理論」をタイトルに選んだ思想史家のヘーゲルへの向き合い方は、本書においても変わってはいない。

ところで、前著と本書で著者の研究足跡はほぼ網羅されたが、プリッターによる講演の翻訳「アリストテレスからアダム・スミスへ—経済思想史入門」（1997年）は、いずれにおいても未収録となった。本書の「解題に代えて」は、この翻訳を新稿「ヘーゲルとスミス」と並べる意図が著者にあったことを明かしている。

著者も翻訳を手掛けたプリッター『経済学者ヘーゲル』（原書1990年、翻訳1999年）には、アリストテレスの痕跡が随所で指摘される一方で、ヘーゲルのスミス受容は批判を含んだ部分的なものにすぎないというトーンがあった。したがってそこには、アリストテレスとスミスをつなぐ記述は見られない。ここに上述の講演の翻訳を重ねると、アリストテレスとスミスは経済学的観点において別次元に立つというプリッターの考えが鮮明に浮上してくる。著者が用意しようとした新稿「ヘーゲルとスミス」は、プリッターの「アリストテレスからヘーゲルへ」という大きな

枠組みを出発点とし、彼が講演においてスミスを描く形を前半部分を改めて問題化したこと、つまり、17世紀まで存続したアリストテレス『政治学』的基本モデルがスミスにおいて完全に転換したことを踏まえたいうえで、ヘーゲルとスミスを再接続する試みとなるはずだったのではないかと、残念ながらその具体的展開を目にすることは叶わなくなってしまったが、本書において著者独自のパラダイムが提出される可能性があったように思われる。

近代ヨーロッパ思想を追跡するなかでも、著者の研究関心の軸はつねにヘーゲルその人の思想的アクチュアリティにあったと考えられる。解読は一貫して慎重であり、原典からのいささかの逸脱もなければ蛇足もない。諸概念を解きほぐす丁寧な引用と注釈とによってヘーゲルを蘇らせる手法は、それに伴う途方もない労力を想像させるが、思想史研究の基本として教えられるところが多い。だが、「古典研究は、古典から現代を見る視点と、現代から古典を見る視点の両方を具えなければならぬ」（79）。そう言い切る著者の姿勢は、全体にわたって前作よりも強めに打ち出されている。緻密な原典解釈に基づいて提起される現代への問いは、著者の社会意識を媒介とした、ヘーゲルの現代への接続である。著者の率直な見解を多く含むであろうエッセイ、例えば「私語について」や「専門的知識と教養」なども収録してほしかったと思うのは、望みすぎであろうか。

社会理論としてヘーゲルを読み解いてきた著者のスタンスと、さまざまな社会的・経済的文脈を取り込む「偉大な経験家」としてのヘーゲルが具体的な姿で浮かび上がってくることに鑑みて、社会と経済の並列はタイトルにふさわしい。本書のタイトルそのものが著者の構想にあったのかどうかは不明だが、評者が世話人の役割を譲り受けた社会思想史学会のセッション名が「18・9世紀ドイツの社会経済思想」として設定されたことから、著者の意向を汲みえてはいるのだろう。とはいえ、「社会経済思想」という括り方そのものに関して評者は、やや曖昧かつ非主体的だという印象をもっている。「資産」や「税」という言葉が並ぶ内容にたいして社会思想でよいか。その一方で、個別化しつつある経済学の領域をこえていくヘーゲルの思想的領野にたいして経済思想でよいか。このような悩みと向き合った時、結局のところ「社会経済思想」しかなかったのだろうというのでは、本書に包括的なタイトルが与えられた理由の推論として、あまりに味気ない。

本書は7つの論考からなる。「ヘーゲルの所有論とマルクス」、「ドイツ古典哲学における結婚と家族」、「ヘーゲルの『普遍的資産』概念について」、「ヘーゲルにおける国家と経済一身分論の展開」、「コルポラツィオン論のビフォー・アンド・アフター」、「ヘーゲルの税の哲学」、「青年F・リストのコルポラツィオン論」、これらに滝口清栄氏の著作の書評と追悼文が加わる。前作、そしてまた本書においても、著者のカント評価は決して低くはないが、ヘーゲルとのコントラストでは若干後退するように見える。それはおそらく、カントよりも積極的に社会的現実の細部に目配りした思想家としてヘーゲルを評価するためであろう。ヘーゲルはステュアートやスミスの精読、ドイツ官房学を受容などにみられるように、近代社会を動かす経済という動力

を、自らの思想構築においても不可避の問題として扱った。彼の社会思想の根本にはしたがつて必然的に経済思想があり、両者の関係は有機的かつ不可分である。ヘーゲルの「社会経済思想」は、社会思想と経済思想の分離を許さず、社会と経済そしてそこにおける人間のトータルな把握への意識を促す。著者が示したヘーゲルの「社会経済思想」の射程の広さは、個別化する学問状況への警鐘をも意味するように思われてならない。

限定的にはあるが、本書の中身に触れよう。「ヘーゲルの所有論とマルクス」では、「近代社会を根底で支える最も基礎的な概念」(9)である「所有」と「人格」に焦点が当てられ、スミスやロック、あるいはカントとの対照を含んで、その具体的論点が『法の哲学』に沿った形で整理される。人格の不譲渡にはじまり、意志の外化としての私的所有、人格の平等などについての丁寧な注釈は、「わかるヘーゲル」という帯の文言を裏切らないが、ヘーゲル所有論の多面性といったような論点霧消状態には陥っていない。この論考においてメッセージ性が強まるのは、最終節「III 所有物の譲渡と労働時間」からである。「個人の特殊なさまざまな技能や活動について、それによる生産物はもちろんのこととして、その技能や活動自体の時間的に制限された使用をも他人に譲渡することができる」(23)と考えるヘーゲルは、雇用労働を認めているが、それは時間的制限を条件としてもいる。ヘーゲルの雇用労働論の基幹部分に著者が見るのは、人格の不譲渡と時間的制限である。マルクスと『資本論』はここで登場し、労働をめぐる両者の基本認識の同一性が説かれ、産業革命以降の現実社会の過酷な描写が引用される。そこに表出する理念と現実のギャップは、あまりに大きい。しかし、現代社会もいまだそのギャップを解消できないでいる。時間的制限と人格の不譲渡を基礎におく雇用労働の

古典的理念を現代に響かせる著者の意図は、現存する長時間労働問題への対峙にこそある。「古典から現代を見る視点」は、ここに体现されている。

「ドイツ古典哲学における結婚と家族」もまた、そのタイトルが予感させるように現代に向かって開かれているが、とりわけフィヒテに強いジェンダー・バイアスを認めるなど、「現代から古典を見る視点」が随所に提示されている。論考はカントの「性の共同体」論にはじまり、婚姻関係における両性の人格的平等、それに付随するものとしての一夫一婦制といった要点が確認されていく。「ここで興味深いのは、カントが、子供を産むという作用を、夫婦が一人の人格を『その同意なしにこの世に生まれさせ、独断的にこの世につれてきた』と見ていることである。このような行為をしたのだから、両親は、この子が『自分のこの状態に満足するよう、力の及ぶ限りつとめる義務が課される』のである」(36-37)という記述もまた、現代に十分に響いている。

これとの関連で評者の関心を強くひいたのは、「母親の子殺し」(41)のカント的解釈にたいする著者の見解である。『人倫の形而上学』(1797年)の公法論には「処罰権と恩赦権」に関する記述があるが、ここでカントは同害報復法に基づいて死刑を擁護している。ところが、処罰されるべきだが死刑には値せずといった例外に、カントは未婚の「母親の子殺し」を置く。そこで考慮されるのは「女性の名誉の感情」である。しかし、母親の名誉と子供の人格の衝突は、究極的には解消しない。

それゆえ著者は、世界市民や人格という言葉とは裏腹に、カントが私生児殺しを肯定してしまうことへの大きな違和感を表明する。Vernichtung という語から大量殺戮兵器と絶滅収容所の表象へと読者を導く部分には、違和感以上の意味が込められているとってよ

いだろう。著者は言う。「ここで注目しなければならないのは、婚姻外に生まれてきた子供の運命であろう。21世紀の人権感覚で裁くことは難しいにしても、カントの発言には人を驚愕させ、震撼させるものがある。…未婚の母親が子供を産むのは『恥辱』であって、女性の名誉を傷つける。だから彼女が不名誉を恐れてたとえ子供を殺してしまっても同害報復の法は適用しにくいというのである」(42)。ただし、女性の名誉への配慮は、未婚の理由への配慮でもあろう。未婚の母親の出産は恥辱であるという価値観にカントが染まり切っていたかどうかは、女性の社会的立場を含めた社会史的記述とともに、別に問われなければならないように思う。

さて、資産や子供の養育などの観点からヘーゲル『法哲学』における家族と結婚の問題が整理された後、家族と市民社会あるいは国家の関係が論じられる。家族は子の自立による分岐を運命づけられ、市民社会においてその絆を失った諸個人へと文字通り解体される危険にも晒されるが、市民社会と国家の一基盤は家族にあるという考えをヘーゲルが手放さなかったことを、著者は強調する。「ヘーゲルの国家は、家族が安定を得、市民社会が十分に発達しているところにおいて、初めてその真の意義を獲得するのである」(71)。ただしあえていえば、「家族がその使命を十分に果たすとき、それは豊かな人間性を育み、安定した個人を市民社会と国家に送り出す場所として、…依然として積極的な意義をもち続けることであろう」(83)との結びは、著者も指摘する虐待やネグレクト、さらにその背景にある貧困といった現代社会の現実と、社会学を中心とした家族概念の変転の渦中にもみこまれてしまっている。コルボラツィオン論を貧困問題にも引きつけた著者ならではの、より具体的な見解に耳を傾けてみたかった。

最後に「コルポラツィオン論のビフォー・アンド・アフター」に触れておきたい。ヘーゲルの職業団体論の要点のみならずその現代的意義が示される点は興味深いが、評者はむしろこの小論が本書唯一の自伝的要素を含むものである点にひきつけられた。初期マルクスに媒介されたヘーゲル像と袂を分かち、コルポラツィオン論における監督・承認論の

問い直しを経て、「硬直的なツンフトの復活」回避のヘーゲル的処方箋としてそれを肯定的に評価するに至る道程は、著者の追思惟の過程をその紆余曲折とともに知ることができ、研究者としての著者の歩みの一端を垣間見せてくれる。

(大塚雄太：名古屋経済大学)